

視覚情報記号論 レジメ 9

名古屋市立大学 2016 年度講義

久木田水生

1 アフォーダンス

認知心理学者の J・J・ギブソンは環境が生物に対して提供するものを総称して「アフォーダンス (affordance)」と呼んだ。例えば十分に硬い地面は、生物の体に対して「支え」を提供する。その「支え」があって生物はその上に立ったり、その上を歩いたりすることができる。アフォーダンスとは生物がある環境において何らかの行為を遂行するための条件となるものと理解することができる。生物は環境から提供される様々なアフォーダンスに応じて、その中で可能な行為を遂行しているのである。

ある環境がどのような行為のためのアフォーダンスを提供するかということは、生物によって異なっている。例えば池の表面はアメンボにとって、その上に浮いて移動するという行動のためのアフォーダンスを提供しているが、しかし人間にとってはそうではない。従ってアフォーダンスは環境と生物という二つのパラメーターで決定される。生物は自らの能力に応じて環境が提供しているアフォーダンスに取り囲まれて、その中で適切な行動をとっている。

2 記号情報とアフォーダンス

生物は知覚を通じて環境から得られる様々な情報に基づいて、その環境がどのようなアフォーダンスを提供しているかを知る。奥行きを知覚から私たちは「前進する」という行為のためのアフォーダンスが提供されていることを知る。このような知覚とアフォーダンス認知の結びつきは、発達の段階において知覚情報と行動との様々な組み合わせを試行錯誤した結果として学習されたものである (レジメ 5 のヘルドとハインによる子猫を使った実験を思い出そう)。ただし経験とは関係なく知覚に与えられた信号があらかじめプログラムされた行動を誘発するスイッチになる場合もある。一般に、より単純な生物においては、あらかじめプログラムされた行動の割合が大きい傾向がある。

人間においてはあらかじめプログラムされた (本能による) 行動のパターンは少なく、ほとんどの行動は環境との相互作用の中で学習していかなければならない (例えば乳児が大きな音に反応して両手を広げるモロー反射、口に入れたものに吸い付く吸啜反射などはあらかじめプログラムされた行動の一種である)。このことは学習のコストという面ではデメリットだが、従来、生息していたのとは異なる環境に置かれても柔軟に適応できるという大きなメリットがある。

人間がパースの意味でのシンボル (恣意的な記号) が使えるのも、この柔軟さのおかげである。シンボルを使用する能力によって、人間は環境の中に、そこでどのようなアフォーダンスが提供されているかを示す記号を意図的に埋め込むことができる。交通標識などはそのようなシンボルとして理解することができる。